



第18号

「PMFを応援する会」会報

# 協奏

2018年3月12日

## 対話から始まる文化交流——韓国での経験より

国際交流基金アジアセンター・PMFを応援する会フェロー 武田 康孝

私の勤める国際交流基金は、日本と世界各国との間で国際文化交流事業を行う独立行政法人です。現在私は「アジアセンター」という東京本部の部署で、主に東南アジアの国々との美術を通じた交流事業に携わっています。昨年は、東京・六本木にある国立新美術館と森美術館の2館で同時開催された「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」や、九州国立博物館と東京国立博物館で開催された「タイ：仏の国の輝き」展を担当し、大勢の方にご来場いただきました。

ふだんは東南アジアにどっぷりつかっている私ですが、ピョンチャンオリンピックをきっかけに韓国に関する報道が多くなったからでしょうか、最近、韓国で過ごした日々を思い出します。

私が海外拠点の一つであるソウル日本文化センターで勤務したのは、2012年から16年までの4年です。この間、ご存じのとおり両国では様々な問題が顕在化し、国と国との関係は必ずしも良いものとはいえない状況が続きました。

そのような中、2015年の日韓外交正常化50周年という外交周年を迎えます。国際文化交流を専門とする機関として何ができるのか、また何をすべきなのか。同僚と話し合いを重ねた結果、これまでの50年を踏まえつつ次の50年につながる事業を企画しようということになりました。そして生まれたのが、「日韓若手文化人対話—ともに語り、考えを分かち合う」というプロジェクトです。

日韓両国の一線で活躍する、20代から40代前半までの文化・芸術関係者—小説家、建築家、美術家、デザイナー、演出家、映画監督、俳優など—に、ぜひ話してみたい相手の国の人はいないかとお声がけし、10人から快諾を得ました。そして、日本と韓国で1回ずつ、原則として一般公開という形で、今考えていることや相手に聞いてみたいことを自由にお話しいただき、それを日韓両言語で出版することにしました。

どの対談も、私たちの事前の予想を大きく超え、興味深く刺激的なものになりました。何より私は、企画者として、始まる時に見え隠れしていた二人の間の微妙な距離感が、対話が進むつれ縮まっていく

と同時に、話の内容もぐっと深くなり、話を聞いている来場者が二人の世界に引き込まれていく瞬間に立ち会うことができたことをうれしく思いました。計10回の対談を通じて、結果として相手の言うことにすべて共感できなかったとしても、まずは相手の話を誠実に聞くこと、また自分の言いたいことを誠実に相手に伝えようとするのがいかに大切なことかということを実感しました。

当初は1年で終了する予定だった「日韓若手文化人対話」も、色々な理由から終了まで足掛け3年かかってしまいました。書籍化も随分と遅れてしまいましたが、このたびようやく、『今何かを表そうとしている10人の日本と韓国の若手対話』といういささか長いタイトルで出版される運びとなりました（クオン刊、3月31日発売）。文字になった対談を読み返しながらか、文化交流とは、こうして人と人がしっかりと向き合い、互いの考えを分かち合うことを様々な位相で積み重ねていくことを通じて深められていくべきものであることを改めて思った次第です。

もちろん、私たちだけがこうした交流を行っているのではありません。今この瞬間も世界中の人々と文化交流を行っている方々に、心から敬意を表したいと思います。



皆様の想いが託された募金をPMF組織委員会 上田文雄会長に「PMFものがたり英語版」50冊と共にお届けし、これまでの寄附総額は5,325,000円となりました。

皆さまのご厚情に改めて感謝申し上げます。

この度の感謝状には **SAPPORO** のロゴマークが記入されていました。



昨年3月に第24回『カフェサロン』が開催されその時の話題のひとつに『PMF』呼称について…、30年近くも開催さ

れていることをあらためて内外に周知するため『札幌』の表記を加えても良いのではないかと…でした。

PMFを応援する会カフェサロン会場で話し合われたことが『皆様宛感謝状』に表現されていたのです。また昨年は新たな事業を行うことができました。

当会は近年応援いただく方々の高年齢化等もあり大きな転換期を迎えておりますがPMF札幌が音楽と芸術は人々に喜びを齎すことを信じ今後も活動を進めてまいります。皆様の変わらぬ熱い応援をお願い申し上げます。

## 平成28年度事業報告 (2016年4月1日～2017年3月31日)

### 《活動状況》

- 前年度会計監査（監事事務所） ..... 4月8日
- 平成28年度定例総会 ..... 4月28日
- 北海道大学講義「PMFの響き」（赤石事務局次長） ..... 6月9日
- 市長主催オープニングレセプション出席 ..... 7月15日
- 定山溪開湯150年記念企画（ぬくもりの宿ふる川）  
アカデミー生と教授陣参加 ..... 8月1日
- PMF組織委員会へ寄付金贈呈 ..... 9月26日
- 藤女子学園大学文化総合学科講義（鈴木敏明会長代行） ..... 10月5日
- 役員研修会「タングルウッド音楽祭」勉強会 ..... 9月20日、11月15日、1月12日
- 「協奏」発行、発送  
15号(3月14日)・16号(10月3日)・17号(2月21日)
- PMF組織委員会との懇談会（林常務参加） ..... 3月21日
- 定例役員会開催全12回 ..... H28年4月～H29年3月
- 役員懇親会 ..... 4月4日
- HP管理
- 竹津宜男遺稿集「PMFものがたり」増刷

### 《募金促進のための主催事業》

- カフェサロン#22 「オープニングで会いましょう」（於ける芸森）  
募金者とアカデミー生交流 ..... 7月16日
- カフェサロン#23 ニドムツアー（ホテルニドム）  
「バーンスタインに出会うツアー」市民とアカデミー生交流 ..... 8月1日
- 平成28年度フェローミーティング ..... 1月17日
- カフェサロン#24（札幌パークホテル） ..... 3月21日

### 《支援事業》

- 伊藤光湖「風のコンサート」名義後援

# 平成28年度募金者名・ありがとうございました。

2016年4月1日～2017年3月31日

敬称略、50音順

赤石尚一	赤石知恵子	赤坂博	雨貝尚子	阿部明美	阿部和男	阿部和加子	安藤佳枝
井浦功雄	池田静子	石井恵	石田時也	石橋喜重子	伊藤敬子	伊藤一雄	伊藤龍子
伊藤光湖	伊藤佐紀	岩崎溪子	大久保多恵	大谷慎一	大谷洋子	岡崎喜実	岡崎大陸
岡崎江美子	小川玲子	荻野弘子	奥村昇	奥村道子	小野サタ子	小野美代子	小野寺務
小野寺恵子	表山千春	加々谷玲子	垣田恒子	梶浦陽子	梶山素子	勝部百合子	角谷知子
川崎美紀	木村清順	久住孝之	工藤由基子	熊谷ユリヤ	熊本寛見	倉岡修子	後藤道
後藤弘子	小松宏人	今裕子	近藤崇	近藤光子	近藤千鶴子	コレット美香子	西條雅穂子
斎藤公美雄	斎藤美年子	齊藤韶子	斎藤晋吾	齊藤千代	齋藤淑子	齊藤美登里	榎原綾子
寒河江潔	坂尻康平	笹田政彦	佐藤勝子	佐藤桂子	佐藤修子	佐藤真紀子	澤口恵子
塩澤正樹	繁富恭子	司馬政一	白石敬子	杉中佐智子	下川弘子	首田尾佑子	杉本純子
杉本智子	須佐富士夫	鈴木喬	鈴木陽子	須田和子	須田真彰	鷺見武	関蓉子
大公一郎	高島勝子	鷹野正義	高橋来	高橋美規子	高橋徹	武田滋子	竹津伊織
竹津香苗	田熊勉	多田富子	田中薫	谷内茂	谷口哲雄	田村輝世子	土屋陽子
天日一光	天日彰子	徳永純子	徳永隆史	徳永洋	中島禮子	中島智栄子	永宮真知子
中村千賀子	鍋田多美子	西川優	榎ぬくもりの宿ふる川	平松明子	根本常子	畠謙二	畑智子
畑洋子	花井美恵子	平田征子	平原弘美	平松明子	平松久美子	廣瀬キミ子	廣田一郎
廣田聰	廣田美貴子	伏木忠了	藤田薫子	藤田澄江	藤森亜矢子	藤原夏樹	古川善雄
星野慶子	細越俊介	本間良子	牧原和美	松川早苗	松田悦子	松宮従子	丸山晃一
丸山清子	三谷和央	目加田懋	森口力	八木幸三	山上智恵子	山中幸光	山中三知
湯原光子	横山憲治	横山圭子	吉田幸弘	若月富男	若月公子	若月香織	他匿名

カフェサロン「オープニングで会いましょう」募金(4,730円)

# 平成29年度募金者名・ありがとうございました。

2017年4月1日～2018年1月31日 (3月31日までのデータは次号に掲載します)

敬称略、50音順

赤石尚一	赤石知恵子	秋野治郎	阿部千秋	安藤佳枝	石井安子	石橋喜重子	上田文雄
上松瑛	大橋亜樹子	大平まゆみ	オノサダコ	小野美代子	加々谷玲子	垣田恒子	加藤淑子
河邨宣子	木村清順	倉岡修子	今裕子	近藤崇	近藤光子	斎藤晋吾	齊藤みちみ
坂尻康平	佐藤郁夫	佐藤はるみ	佐藤真理	島田宏子	白石敬子	杉本純子	須田和子
丹野美佐江	天日一光	天日彰子	徳永純子	徳永隆史	徳永洋	中島智栄子	中野敏仁
鍋田多美子	野上まさ子	野呂洋子	廣田聰	廣田美貴子	花井美恵子	福田実暉子	藤井正一
藤田澄江	船橋利実	牧原和美	宮部光幸	宮本和弘	八木幸三	四ツ柳奈緒	他匿名

カフェサロン「オープニングで会いましょう」募金箱(2,030円)

## 募金状況

2016年4月1日～2017年3月31日

2017年4月1日～2018年1月31日 (3月31日までのデータは次号に掲載します)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H28 募金額 790,230円	149,000	70,000	36,000	51,230	20,000	3,000	149,000	79,000	53,000	25,000	61,000	94,000
203件	37	20	10	11	3	1	35	19	14	3	20	30
H29 募金額 193,830円	38,000	24,000	12,000	44,030	16,000	0	22,000	0	15,800	22,000		
49件	12	8	3	10	4	0	4	0	5	3		



募金ありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。



第24回のカフェサロンは豪華なゲストをお迎えして、30回目を迎えようとしているPMFのあり方について改めて考えるサロンを催しました。会場にお越しいただいた50名のお客様には和やかな雰囲気の中、プログラムは進みました。

♪ 鼎談（3人の談話）、札幌の文化としてのPMFの今後

北海道文化財団理事長 …………… 磯田 憲一

PMF組織委員会会長 …………… 上田 文雄

PMFを応援する会会長代行 …………… 鈴木 敏明



♪ Tea Time（お茶とお菓子）

♪ PMFを応援する会 勉強会レポート …… 伊藤 佐紀

♪ ミュージックセッション・異色のコラボレーション

札幌コンサートマスター …………… 大平 まゆみ

サクソフーン・プレイヤー …………… 田野 城寿男

♪ 散会前は組織委員会からのくじ引き賞品提供もあり、豊富なプログラムを楽しんでもらいました。

以下でその内容をご紹介します！

## 鼎談（3人による談話）

磯田憲一氏（北海道文化財団理事長）と上田文雄氏（PMF組織委員会会長）のお二人からは、鈴木敏明（応援する会会長代行）の司会のもと、様々な角度から貴重なお話を伺うことができました。PMFの「これから」を考える上で、どのようなことを議論しなくてはならないのかという論点や、お二人がこれまで手がけてこられた数々の成果やエピソードを踏まえた事例、札幌や北海道の「文化」という視点から見た望ましい将来像…などなど。ユーモアを交えながらも、鋭い切れ味の応酬がありました。聴いている側も頷いたり、笑ったり、ハラハラしたりと忙しいあつという間の45分間でした。

## 鼎談トピックス…

- ・ PMFは自分たちの音楽祭であるという、当事者として主体として関わる意識。
- ・ PMFの名称、Pacific（環太平洋の／平和の）のPの部分をもっと大切にすべきでは？
- ・ 作曲家が天の啓示により作曲した曲を、演奏家は懸命に研鑽した技術と心により美しく奏でる。音楽は人類の財産。
- ・ 時をかけてPMFを市民全体の財産にしていく。北海道や札幌の自慢の種になるように。
- ・ こうした音楽祭を開催できることこそ「平和」の体現なのだと、いろんな形でメッセージ発信。
- ・ PMFを訪れる人が羨むまちづくり。
- ・ Pacificの接尾語【-fic】には、「つくる」という能動的な意味合いがある。（質疑応答より）



## 勉強会レポート タングルウッド に学ぶ



PMFを応援する会では、2016年の10月から3回に渡って、タングルウッド音楽祭に関して勉強会を開いてきました。今回のサロンでは勉強会の中から、実際にタングルウッド音楽祭を訪ねた様子やインタビューの内容が紹介されました。

音楽祭のココが良かったという点は、美しい自然と素晴らしい音楽の他、演奏者・運営側・ボランティア・観客・街の人など、携わる人全員のワクワクした笑顔があったこと。それからこの音楽祭には古いものと新しいものが両方あり、両方あることが価値として認められていること。そしてどこを見渡しても、イキイキした感じがあったことなどが挙げられました。

タングルウッドビジネスパートナーマネージャーのMr.Obenwegnerに音楽祭成功の秘訣をインタビューし、「レジデントオーケストラの存在」と「地元との密接な関わり」の2点が強調されました。特に後者に関しては280のビジネスパートナー、地域住民の無料招待コンサート、子供向けプログラム、街に滞在する音楽家の存在、組織的ボランティアの活躍があり、何れも成功にかかせない要素だということでした。

また今回のレポートのために追加インタビューがメールで行われました。一部を紹介すると…

Q.ポストンシンフォニーオーケストラ（BSO）の役割は？

A.音楽祭とBSOは同一組織で運営され、一体だと考えられています。

Q.経済的苦境に陥ったことは？

A.いつもです！（チケット収入45%・寄付55%）

Q.音楽祭と地元との関係は？

A.音楽祭が地元にあって幸運だと地元は感謝していますし、地元の誇りだと考えています。音楽祭に対する地元の愛情は、地域住民8,000人以上の人から何万ドルもの寄付に現れています。



## ミュージックセッション

札幌のコンサートマスター大平あゆみさんのバイオリンと、世界で活躍される田野城寿男さんのサクソとの夢のコラボレーション、お二人で即興演奏を披露していただきました。相手のフレーズを自分の演奏へと即座に巧みに取り入れ、繰り返す、はたまた全く違う音色で気まぐれに、あるいは相手に向かって激昂したり反論したり、そっぽ向いたりなだめたり、優しく歌ったり。まるで音楽で対話や議論、対決しているようでした。「話されてることば？はわからないけど、でも解る！」とでもいうような音楽的コミュニケーションそのものを目の当たりにした思いでした。

聴いている方は、とってもワクワク。うっとりしたり笑ったり、緊張したりビックリしたり！後でお聞きすると、事前の打ち合わせはなく会場で意気投合してこのセッションに至ったとのこと。再びビックリです。目の前に展開する音楽のダイナミックな臨場感に、会場が一体となる経験でした。次回の実現も期待したいですね！



## カフェサロン# 25

### オープニングで会いましょう

2017年7月8日 10:00~13:00  
芸術の森アートホール ロビー



PMF2017オープニングが始まる前にカフェを開きました。アートホール ロビーにはPMFファンやアカデミー生ばかりでなくPMFを知らない親子連れなど、150名ほどが入れ替わり立ち替わり訪れてくれました。PRのいい機会でもありました。暑い日でしたので、屋内でのドリンクやスイーツの提供は喜んでもらえました。

さらに市民からの紅茶（ジャワティー）とカップケーキ（メイベル）の差し入れでサービスカウンターはさらに豪華になりました、感謝。また、カウンターに置いた募金箱には2,030円、ありがとうございました。

皆さまと紡いでいく交流の場、来年もお会いできますように・・・と後片付けに精を出しました。

## カフェサロン# 26

### ニドムツアー 2017年7月24日



バーンスタインの聖地、ニドムをアカデミー生と一緒に巡るツアーにアカデミー生19人、市民13人を乗せてホテルニドムのバスはスタートしました。高速道路からニドムの森入ると別世界、葉緑素いっぱいの空気が溢れていました。バスから降りるとポーランドからの弦楽四重奏団、フォーチュン・カルテットの歓迎演奏。驚いたことに、ポーランド出身のアカデミー生アンナ ブーダ（ヴァイオリン）さんの友人がカルテットの中にいて、ここで再会！なんていう偶然でしょう！

バーンスタインも歩いた道、過ごしたロッジを見学したあとは、バーンスタインやマイケル ティルソン トーマスのサインが残るピアノが置かれているチャペルに集合。

余韻を愉しんだ後、「幸せなら手をたたこう」を合唱。アカペラで練習した後にアカデミー生のピアノ伴奏で ♪If you're happy and you know it ~、♪幸せなら手をたたこう~と身振り手振り付きの歌声はベーゼンドルファーと共に響きわたりました。



ランチは戸外でのビュッフェ。パラソル越しの柔らかな陽ざしと風の中で豊かに時間が過ぎていきました。ホテル・ニドムのご協力にも深く感謝いたします。



## アカデミー生の メッセージ

- 我々のためのニドムツアーをオーガナイズしてくれてありがとう！今日はこんな素晴らしい機会を持って幸せです。[ジョセフ ギマライス、チューバ、ブラジル]
- 素敵な場所を訪ねられてインスパイアされました。バーンスタインはこの木々の間で穏やかさや楽しさを感じ想像力を養えたと思います。おもてなしありがとう。[サミール アプテ、チェロ、アメリカ]
- バーンスタインの部屋を訪ねられ楽しみました。食べ物にも感激、お天気も最高で楽しかった。[ヤーッコ ライヴオリ、ヴィオラ、フィンランド]
- バーンスタインとのつながりを深く感じました。おもてなしは嬉しく食べ物最高！[キム ベッカー、ヴィオラ、イギリス]

昨年は新たな事業を行うことができました。アカデミー生にPMFの音楽以外の部分も体験をとの提案がありその方々のご支援がアカデミー生とスタッフ総勢25名で7月24日『小樽の歴史と定山溪温泉を訪ねる1日旅行』となったのです。

この事業は株式会社メディカルシステムネットワーク 秋野治郎氏、株式会社宮部 宮部光幸氏、株式会社めくもりの宿ふる川 古川善雄氏に応援いただきました。今年もよろしく願い申し上げます。

このツアーの様子を少しだけ紹介しますと・・・そろそろ小樽という時、『海だ〜』という喚声がそれぞれの言葉でバスの中に飛び交いました。

小樽市内めぐりと散策、昼食の後は定山溪に。定山溪温泉では浴衣を着せてもらいお抹茶とお菓子と大浴場と足湯でニコニコ顔でした。

アカデミー生から、「すてきな旅の企画をありがとう、忘れられない日です」、「PMFオーケストラの3週間からの最良のリハビリとなりました」、「ここが好きです、また行きたい！素晴らしいところです」と感謝の声が寄せられました。今回の参加者は申し込み順に15名と限られました、また喜ぶ顔を見たいです。

小樽の様子を秋野さんが文章で寄せてくださいました。

この新しい一日はレナード・バーンスタインが思ったPMFの小さくても大事な部分かも知れないと感じました。

株式会社 メディカルシステムネットワーク  
代表取締役副社長 秋野 治郎



「質問があります。どうして私のお母さんの味が小樽にあるのですか？」

明治時代、北海道の隣の島樺太は帝政ロシアの政治犯の流刑地だった。東欧の反体制のインテリゲンチャーをシベリア送りだけでは安心できず、宗谷海峡を挟む地に島流しした。小樽商人の私の祖父は日露戦争で占領したアレクサンドルフスサハリンスキーに支店を開設ポーランド人の学生流刑囚グスタフさんを支配人とした。ロシア革命まで小樽の本店に決算報告にきた。ヨーロッパの煮込み料理が叔母たちに伝えられた。PMFの感性豊かなアカデミー生からの冒頭の質問が私たちの海外との交流を嗅ぎ取って発せられたのなら受け継いできた者としてこれに勝る喜びはない。

最初に「小樽もったいない博物館」見学。寒さと雪の多いこの地域で子供や老人をお世話する手作りの道具達に共感をいただく。特にプロポーズの応諾の証に編まれたセーターに頷くアカデミー生の微笑みに心が通う。

ランチは場所を移して円吉山別荘（べっしょ）。大綱元木村円吉別邸をキタラ建築の全体統括された宮部光幸氏が改修設計。この地域に伝承された欧風料理を楽しんでいただく。時を超え、ポーランドの流刑囚グスタフさんがこの席にいたらいったい何を語るだろう。次回はショパンを手向けたいものだ。PMFを応援する会に参加させていただき感謝。皆さんの協力で、私たちの夢が叶う。



## フェローミーティング報告 「2019年、30回を迎えるPMFさっぽろと当会の方向性を考える」

去る1月15日PMF組織委員会 上田文雄会長、横井事務局長を迎え、フェローメンバー多数のご参加をいただき、2017年度フェローミーティングが開催されました。なごやかな雰囲気の中にも、「PMFさっぽろ」にとってのみならず当会にとっても大変有意義な意見交換の時間を持つことができました。その内容の一部をここにご紹介いたします。

**鈴木会長代行挨拶**の中では、PMFが札幌に今後もあり続けてほしいという意思の表れとしての市民による一口募金という先駆的活動は一定の効果を生んだ。又募金活動活性化のためのカフェ・サロンの開催は夏の文化イベントへのけん引役として評価された。今後はメンバーシップ、パートナーシップをどのように具体化していくかという課題について考えたい。

**上田会長、横井事務局長**からは今後に向けての新しい試みや、レナードバーンスタイン生誕100年の今年の主なスケジュールなどについて紹介がありました。

**意見交換**の中では、それぞれのフィールドでのPMFにかかわる体験が紹介され、今後のPMFにどのように貢献できるかなどについて活発な意見が出されました。紙面の都合ですべてはご紹介できませんが、集約すると以下のような内容です。



- 「つなげる」活動を企画、運営することで多くの人々とPMFの「つながり」を強めていくことがフェローの役割ではないか。単なるクラシックファンを増やすのではなく、社会参加する市民意識を醸成するけん引的役割を果たしたい。
- アカデミー生にとって：参加経験を通してレベルの高い音楽を学び、異文化に触れる。
- 組織委員会にとって：「なぜ札幌で」という意義をアピールし地元文化としての位置づけを強めたい。
- 若い世代（特に大学生）にアプローチして関心を持ってもらい、担い手になってもらう。
- 同年代のアカデミー生との出会いが将来につながるだろう。
- 市民（地域）にとって：周囲の人を巻き込むことで、PMFのより広範な繋がりを作り出す参画者になってもらう。それが地域力になる。
- ボランティアとして：市民一人ひとりが持っているものをいかに生かし、そのかわりを通してPMFの当事者意識につなげるかを考えて企画運営に当たる。今後パトロネージュ方式ということも考える。
- フェローとして：様々な場での出会いやエピソードを生かし、その語り部としてPMFを応援する。

以上の内容で活発なご意見をいただき、今期及び30回にあたる来期に向けての当会の方向性を確認することができました。





## 2018 PMFを応援する会 新体制…?

皆様からご協力いただいた大切な募金。毎年、組織委員会へ持参し、PMF開催のための貴重な資金の一部とさせていただきます。心より感謝申し上げます。

当会は、9年前の会立ち上げの時から、市民の皆様からの貴重な浄財をお預かりして、音楽祭運営資金の一部とさせていただき仕組みを支えてきました。大手企業の寄付や支援とは別に、市民の皆様お一人お一人に寄付をお願いすることの意義は、ただ、一定額の資金を募金箱へ投入することとは異なり、音楽祭を支える当事者としての感動を分かち合う契機になったらとの願いもありました。

近年、組織委員会でも個人向けの寄付の窓口が設けられたことは、音楽祭を応援するという元々の意味でも、当会が先駆的役割を果たせたのではないかと大変喜ばしく感じております。一方で、当会と窓口が二つになったことにより、片方の集計は当然元の通りではなくなります。加えて、継続的に寄付して下さっていた方々のご訃報やご病気の知らせもございます。何より悲しく寂しさが募ります。こうした事情を踏まえて、当会では、個人寄付を社会に呼びかけるという役割は続けながらも、新たな役割はなんだろうかと考えることをはじめました。次の段階へ進む準備です。



◆ まず、大切にしたい理念、変わることなく引き継いでいくべき役割について、もう一度確認をしました。

- ・音楽祭の成功を応援すること
- ・寄付文化を定着させること
- ・まちの文化の質を高めること
- ・市民が参加できる体制を提案し、PMFと市民を繋ぐこと

◆ そして、これらの実現を推し進めていくために、従来とは違った新しい3つの方策について検討中です。

会員制、パトロネージュ制、パートナーシップ制 です。

**会員制**は、資金を安定的に調達するために、多くのボランティア団体、NPO法人などで取られている制度。賛同する人々が「市民」として集う「アルテピアッツァ美唄」の例なども参考にしながら、当会に相応しい会員制の形を模索しているところです。

**パトロネージュ制**は参加型支援とも呼ばれる方式です。市民の皆様は、アカデミー生の札幌滞在中、食事などのもてなしをはじめとする企画運営に直接携わっていただく時間とエネルギー、物資、資金など、負担可能であって、希望に応じた形態を選択していただき支援をお願いする形式となります。例えば、アカデミー生2、3人を送迎付きで食事に招待したり、アカデミー生1グループを吹奏楽部や弦楽グループとセッションさせたりなどがこれに当たります。また今年度、個人で地元小樽に所有の歴史的建築物に招待して昼食をご馳走して下さったり、自社所有の足湯を楽しませて下さった事例があり、アカデミー生は得難い経験と大変喜んでおりました（本紙 p.7 参照）。パトロネージュ制を考える上で大変参考となる事例でした。アカデミー生のみならず、市民にとっても、貴重な文化交流の場を提供する契機となりました。

**パートナーシップ制**は、これまでアプローチすることのなかった、企業に支援をお願いする方式です。支援の形態は、資金だけでなく、その企業が取り扱う製品やサービス、あるいは社員の皆さんのマンパワーとなります。支援をいただく企業にとって、社会貢献事業の一環となるばかりでなく、社員研修や市場リサーチの機会とも、あるいは企業イメージの向上や広告費の削減ということにもメリットを見いだすことのできる方式といえるかもしれません。例えば、会場と宿泊施設をつなぐバスの提供であったり、ステージ上の花の提供や飾り手伝い、ピクニックコンサートに設置される飲み物ブースで人手や飲み物の提供など。パトロネージュ制と同じく、負担可能であって、希望に応じた形態を選択して支援をいただく方式です。

ここに挙げたどの方策も、組織委員会との協力のもと、わたしたちのまち札幌の国際教育音楽祭を盛り上げ、成功させようという熱意に基づいているものです。そしてさらに、もっと市民の皆様おひとりおひとりに、音楽祭に参画していただきたい、参加していただきやすいやり方は何かとの思いから模索を続けています。

皆様のご意見、アイデアをお寄せいただければ幸いです。



・・・つ・な・が・る・・・

1993年7月、PMF事務局にいた私は1本の国際電話を受け取りました。

それは娘の安否を気遣う父親からでした。

前の晩、北海道南西部は大きな地震に見舞われ、夜明けと共に奥尻の津波被害が明らかになってきたところでした。

携帯もメールも無い時代でしたから、娘さんが無事であること、折り返し電話させますと伝えると、父親は音楽祭関係者の無事を祈り、お見舞いの言葉を残して電話を置かれました。

その年PMF音楽家達の提案で募金活動や追悼演奏が行われました。

さて昨年秋、長年の友人であり敬愛するボストン交響楽団のピオラ奏者ミーシャ・ザレツキーさんと久々に再会しました。彼の東日本大震災の被災地を訪れ何かの役に立ちたいという強い希望を知り、急遽石巻にある知人のホールでの演奏会を企画しました。そのホールは津波全壊地区で奇跡的に生きのびた建物で地域の人々の癒しの場となっていました。東京まで迎えに行くことこの演奏会に興味を示したボストンラジオ局の記者も同行することが決まり、ドキュメンタリー番組さながらインタビューをされながらの三人旅となりました。

ザレツキーさんは旧ソ連出身で70年代に亡命、その時彼と家族を救ったのがバーンスタインでした。ローマでザレツキーさんの演奏を聴いたバーンスタインはすぐに彼をタングルウッドに招き、ボストン交響楽団に入団させたのです。当時まだ幼かった娘さんは後にPMFアカデミー生として来札し、ホームステイを通じて札幌の人々と家族ぐるみの交流が始まりました。それはザレツキーさんの来道のきっかけとなり、彼の誠実で穏やかな性格と名演奏でファンが増え続けました。

そしてラジオの取材中に判明したのが、25年前私が受け取った電話は実はザレツキーさんからだったのです。あまりの偶然に驚きました。娘さんから聞いた奥尻の話の記憶が東日本大震災の映像に重なり他人事とは思えなかったそうです。

ピアニスト、PMFを応援する会 フェロー 柴田千賀子

英国でピアノを学び欧州で数々の賞を受けた後、渡米し公開レッスンや講義を行う一方演奏活動を続け帰国。PMF組織委員会に勤め、PMFのはじめの頃、ある時は通訳、伴奏、ボランティアとの対応等フレキシブルに活躍。北海道教育大学非常勤講師を10年間務めた後、国内外で演奏活動中。2017年CDリリース。

石巻の会場には故郷を去った人、避難住まいの人等様々な状況の方々が集まりました。鎮魂を祈る静かなザレツキーさんの語りから始まり、シューベルト、シューマン、



ショスタコーヴィチが演奏されると、元気そうに見えた人々の顔に一瞬遠くをさまようような表情、そして涙が浮かびました。当時のことを思い出していたのでしょうか、終演後ザレツキーさんと記者を囲むように集まり溢れるように体験談を話して下さいました。「忘れようと努めていたけれど、この体験は忘れてはいけなくて実感した」「アメリカも含めた多くの人々にも知ってほしい」と熱心に話されていました。記者の女性も被災現場を訪問した直後でもあり真剣に聞き入っていました。

ザレツキーさんの話題提供もあり最後はバーンスタインと北海道の話で盛り上がり、皆でPMFでの再会を誓い合い別れました。

バーンスタインが札幌を選ばなければ？ザレツキーさんをタングルウッドに招いていなければ？娘さんがあの時PMFに参加していなければ？とPMFがもたらす不思議な縁を感じた旅でした。

バーンスタインが考えていた平和のための音楽祭も来年で30年目。アカデミー生たちが持ち帰った小さな種が様々な形でそして世代を超えて人々の心の中に育っているのを実感させられました。さて今年はどこでどのような出会いが生まれるのでしょうか。若き音楽家たちに託された平和の種が世界中で花咲きますように！

#### ～ コンサートのご案内 ～ 武満 徹 生誕88年記念演奏会

2018年6月16日(土) 18:00開演 モエレ沼公園 ガラスのピラミッド(札幌市東区モエレ沼公園1-1)

小泉 浩(フルート)、柴田 千賀子(ピアノ)

お問い合わせ：モエレファンクラブ 電話・FAX：011-796-6936 メール moerefan@moerefan.or.jp





## PMFものがたりはじまりの頃を翻訳して

会議通訳者、札幌大学教授

PMFを応援する会フェロー

熊谷 ユリヤ

毎年、PMFが近づいてくると、1990年の第1回から約20年間にわたり、組織委員会やニューヨークPMF財団理事長だった故ハリー・クラウト付きの通訳を通じて出会った人達が懐かしくなります。特に去年は、組織委員会オペレーティング・ディレクターだった竹津宜男さんの遺稿集「PMFものがたり ― はじまりのころ ―」の英語版「UNTOLD STORIES OF PMF」Posthumous Manuscripts by Yoshio Taketsu」を担当したので、思いはひとしおでした。

遺稿には、不思議な偶然の積み重ねでPMFが札幌に舞い降りた創設期から、レニーの死で一時は存続が危ぶまれた第2回の開催までの話が、時に苦労が偲ばれるような、時にユーモラスな竹津節で展開されていました。今にも声が聞こえてきそうな原稿を読み込み、英語の読者のために説明を加えたり、英語の読者が当然知っている説明は省いたりなどの編集をして翻訳する過程は、天国の竹津さんとの再会や対話の時間に似ていました。音楽を知らない札幌市の職員が殆どだった初期の事務局で、唯一音楽関係者だった竹津さんあってこそ、今のPMFがあるのだと思います。

PMF期間中は、アテンド・開会式・レセプション・コンサートステージ・取材等、様々な場面の通訳を担当しましたが、一番大変だったのがNYのPMF財団と組織委員会事務局の会議でした。長い間レニーのマネージャーで親友だったハリーは、レニーの理想を叶えるためアーティストの意見を代表し、事務局は札幌市や市民の立場を代表して議論が続ききました。両者ともPMFのためを思っているのですが、世界のクラシック音楽界や国際音楽祭では当たり前のことが、日本や事務局にとっては当たり前ではなかったり、日米の習慣や考え方が全く違ったり、ハリーは結論から先に直接的にもの言うけれど、日本側は必ずしもそうではなかったりなどの違いもありました。

ときに深刻な、ときに激しい応酬の通訳で板挟みになった私にとって、竹津さんは心のオアシスのような方だったのです。ある日、会議の後で精神的に疲れ切って、外で泣いていた私の隣に竹津さんが来て、黙ってハンカチを差し出しました。それ

が余りに映画かテレビドラマの一場面のように、私は一転して笑いだし、不思議がる竹津さんにそれを伝えて二人で笑い転げたことも、今となっては懐かしい思い出です。

通訳現場では予測不能なこと、話の転換や駆け引きがあったり、交渉がうまくいかない時、「私の主張をちゃんと訳してくれているのか!」とクライアントに叱られたりと色々ありますが、対人コミュニケーションの架け橋であることを実感できます。一方、孤独で時間がかかり味気ないと感じることも多かった翻訳の作業が、今回は、不思議と楽しいものになりました。竹津さんをはじめとする「知られざるものがたり」の登場人物たちとの対話的な時間や、あの20年間で何度も何度も通訳したエピソードの反芻や、ハリーから繰り返し聞いていたレニーのエピソードを思い出しながらの作業だったからです。

今年、雪まつり会場にレニーの生誕100年を祝う雪像が作られたことで、PMF創設者を市民に再び思い出させたり、世界から訪れた人たちにも知ってもらえたと思います。去年翻訳したのは小さな本ですが、偉大な、陰の立役者が語る創世期のものがたりを、英語に関心がある市民や外国の音楽ファンなど、更に多くの方たちにも知ってもらうためのツールになればと思います。「PMFの昔話を知っている私達が、創設期の語り部として伝えていかなければね」と、かつて竹津さんと話したように。



「PMFものがたり」「Untold Stories of PMF」

お問い合わせは 080-4044-4341 (鈴木)

**「協奏」は皆さまの募金で作られています。ご支援ありがとうございます。**

**PMF2018シーズンも宜しく願いいたします。**

発行 PMFを応援する会 〒005-0854 札幌市南区常磐4条2丁目17-13「カフェ・ディ・レニー」内  
FAX専用：011-827-5181 ホームページ <http://pmf-support.main.jp/>  
フェイスブック [www.facebook.com/much.love1990pmf.sapporo](http://www.facebook.com/much.love1990pmf.sapporo) (印刷協力 株式会社マルシン)